

## 序言

### 小島康敬（国際基督教大学アジア文化研究所所長）

国際基督教大学（ICU）アジア文化研究所は、例年キャンパスが美しい紅葉の時期に学術シンポジウムを開催している。昨年度は縁あつて日本東アジア実学研究会（会長 小川晴久氏）と共催する形で、十一月二十三日・二十四日の両日に渡つて開催した。日本東アジア実学研究会は中国実学研究会、韓国実学会と協力して、二年に一度の国際的な学術大会を日本・韓国・中国と会場を持ち回りで開催してきている。そして昨年度の十二回目は日本が当番にあたる年であつた。その日本での開催にあつて、日本東アジア実学研究会からICUでの開催の可否が寄せられた。実学研究の先駆者であり、東アジア三国による実学研究大会の生みの親ともいうべき源了圓先生（学士院会員 元本学教授）が当研究所の顧問であられることからしての縁のつながりであり、快くお引き受けすることが所員会議で決定された。

ICUでの開催にあつては、本学がリベラルアーツ教育を前面に掲げている点に鑑みて、大会テーマを「東アジア世界の『知』と学問——伝統の継承と未来への展望」とし、広く一般市民に公開することを旨としたオープンシンポジウムという形をとらせてもらった。そしてシンポジウムでは、「実学」という用語の細か

な定義に拘らず、「学問」「学び」という緩やかな括りで、東アジア世界において「知」の営みがどのように展開されてきたのか、またそれを将来に向けてどのようにに継承・発展させてゆくかを考え、討議して頂いた。基調講演を皮切りに、それぞれの個別的な研究報告において、近代以降の西洋的な学問知から抜け落ちた東洋の「知」と学びの伝統が二日間 に渡って真摯に議論された。

シンポジウムでのこれらの成果はアジア文化研究所の紀要に収録して公刊するのが通例であるが、今回『アジア遊学』一七六号として市販のルートに乗せて出版できたのは、偏に勉強出版のご厚意によるものである。勉強出版には出版の便宜だけではなく、大会の趣旨をご理解下さり、協賛金の援助を賜った。あらためて深く感謝申し上げます。

なお、このシンポジウムがきっかけとなって、将来世代に向けて語り伝えたい思想家を日中韓の三カ国からそれぞれ三十三人を選んで計九十九人（二〇〇人目は読者自身）の実学思想家事典を出版したらどうか、と話が進展した。その共同企画の実現に向けた作業が日韓中のそれぞれの実学研究会のもとで目下進行中であり、近いうちに勉強出版から公刊される予定である。

二〇一四年六月